

人間を守る。平和をつくる

若さと実行力で「平和の党・公明党」「大衆福祉の公明党」をリードする、谷あい正明参院議員のインタビューを2回にわたって掲載します。1回目は、平和外交と「人間の安全保障」による平和構築についてです。

——内戦が続くシリアの難民問題が注目される中、9月28日から10月2日の間、中東を訪問されました。目的は、

谷あい 中東和平に向けた、「人間の安全保障」に基づく公明党らしい人道支援のあり方を探るために、ヨルダンのシリア難民キャンプやパレスチナ自治区ガザ地区などを視察しました。

訪れたヨルダン最大の「ザアタリ難民キャンプ」には、約8万人のシリア難民が避難していました。キャンプ生活をしている人は1割で、9割近くの人がヨルダン人のコミュニティに紛れ込んでおり、国連を経由したシリア難民への直接支援とともに、難民を受け入れているヨルダンやレバノンなど周辺国に対する支援が不可欠と感じました。この両方の支援ができている国は日本ぐらいだと、現地では高く評価されています。

——ガザへの入域は極めて異例だったようですね。

谷あい 昨年、イスラエルとパレスチナ自治政府が停戦合意し、各国の政治家が入域を試みっていますが、両政府の双方が許可するケースはほとんどない。ドイツ、デンマークの議員も断られたし、日本の超党派の国会議員も門前払

いになったと聞いています。

両政府当局に入域を許可した理由を尋ねると、「人道目的であり、日本は中立で、中東各国や国連機関の信頼が厚い公明党議員だから」と同じ答えが返ってきました。ガザは中東紛争の中心地であり、その最前線を歩くことができただけで公明党だけです。国際社会が「公明党は平和の党」と認めていることを現地を訪れて実感しました。

——ガザ住民は親日的だと聞いていますが。

谷あい はい。学校の授業を参観しましたが、ガザの子どもたちは東日本震災のことをよく知っていて、毎年、3月11日に凧揚げをして復興を祈念してくれているのです。うれしいことに、訪問した学校の校長先生と生徒3人が、国連スタッフと共に来日し、11月3日に友好関係がある岩手県釜石市と一緒に凧揚げをすることができました。

安倍晋三首相、山口那津男代表にも会っていただきましたが、その席上、生徒の一人、モハメド君(14)は「釜石の津波の映像を見て、昨年のガザの戦争を思い出して悲しかった。家族を失っても笑顔でいる釜石の子どもたち、復興に進む姿が心に残った。ガザも



戦争の傷痕が残るガザ地区で、谷あい氏は子どもたちの明るい笑顔に出会った
＝2015年9月 パレスチナ・ガザ地区

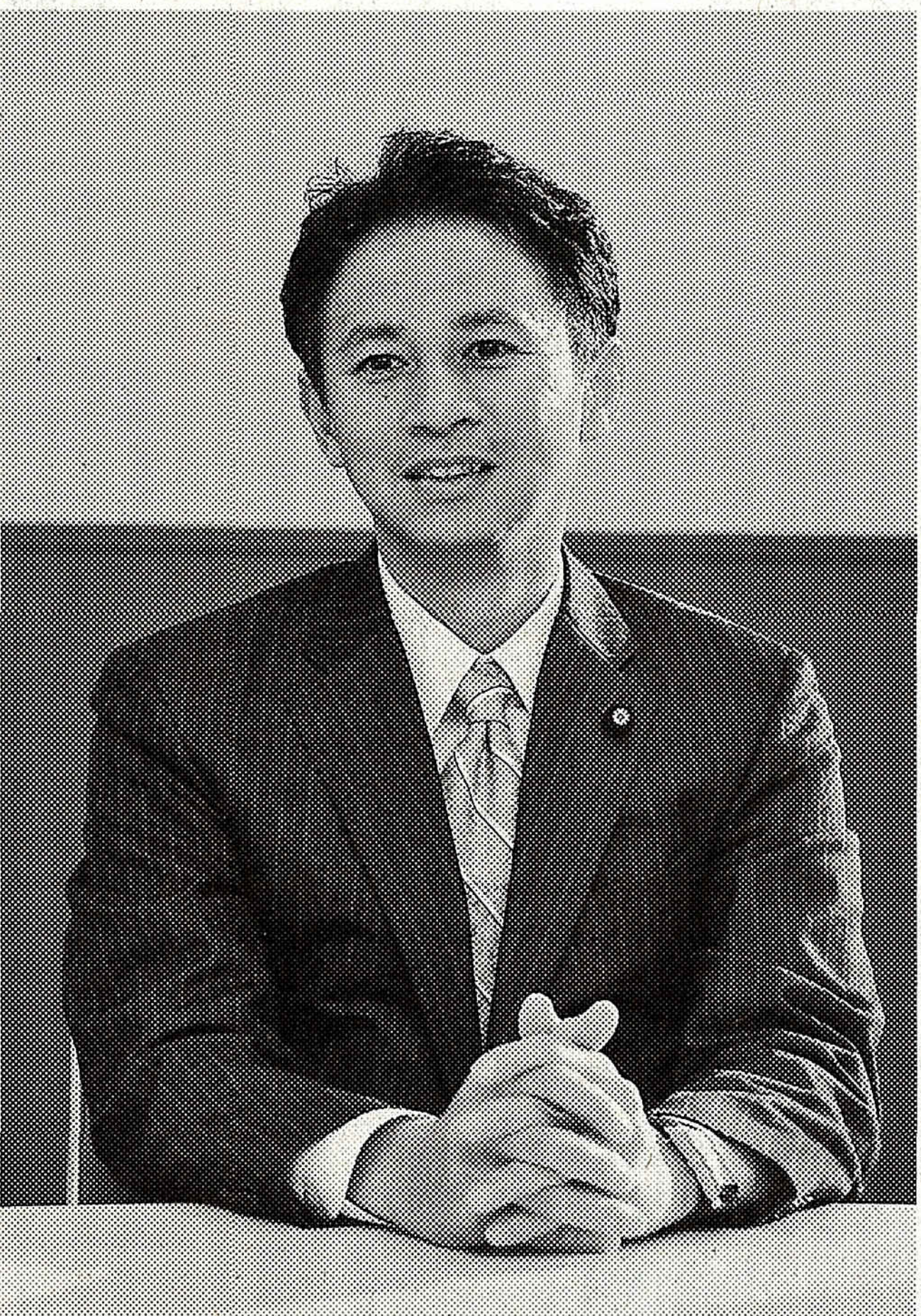
同様に復興したい」と語りました。私は感動し、あらためて荒廃したガザの復興に力を尽くすことを誓いました。

——日本ができる復興支援とは何でしょうか。

谷あい ガザ復興のカギは教育だと思います。教育レベル

ルは高いのですが、子どもたちはガザ地区から外に出られず、受けた教育を生かす機会がありません。留学生の受け入れ拡大など、ガザの復興を担う人材を育てる教育支援に取り組みたいと思っています。

パレスチナ自治区ガザ地区 隣接するイスラエルとの間で大規模な紛争が過去6年間で3回あった地域。面積365平方キロ。人口176万人のうち132万人が難民で、復興の遅れや40%以上の失業率などが課題となっている。アムダ 1984年、医師の菅波茂氏が設立。岡山市に本部を置く国際医療ボランティア団体。災害や紛争発生時に国内外で医療・保健衛生分野を中心に緊急人道支援活動を展開している。



たにあい・まさあき／党中央幹事、同国際局次長、同難民政策プロジェクトチーム事務局長、同中国方面副本部長、同岡山県本部代表。京都大学大学院修士課程修了。参院議員2期。42歳。

常に人道支援の最前線へ

——谷あいさんは、幼少期から国際平和に関心があったようです。両親によれば、3、4歳頃のお祈りは「おねしょがなくなりますように」と「戦争がなくなりますように」に「だったそうです」。

谷あい それは覚えていません(笑い)。

——小学生の頃、ベトナム戦争で足をなくした子どもの写真を見て、「大きくなったら、そういう子のために働く」と言っていたことは。

谷あい それも覚えていませんが、母がジャーナリストだったのでそういう資料は家にいっぱいあったと思います。高校生の頃から、世界の紛争や飢餓、貧困問題などに取り組みたい、将来は国連職員になりたいと思い、大学、大学院では途上国の農業開発を専攻しました。国連職員になるには語学能力と専門性と職業経験が必要ですから、海外の紛争地域で経験が積めるアムダに就職しました。

——どのような仕事を。

谷あい 例えば、パキスタンのアフガニスタン難民キャンプの場合だと、国連機関と一緒に現地調査して、診療所が必要だとすると事業計画書

を書いて、国連と契約を結んで、医師や看護師を集め、診療所を立ち上げて。アジア、アフリカ11カ国・地域で難民支援に従事しました。

——危険なところもあった

——今回の平和安全法制の国会審議でも、難民支援の現場の視点で論戦を展開されました。

谷あい 21年前、アムダが旧ザイルのゴマでルワンダ難民の救援活動中、群衆にトラックを強奪され、近くで活動していた陸上自衛隊に救出された事件を取り上げました。当時、邦人の救出は自衛隊の任務に入っていませんでしたが、隊長は独断で実行してくれたのです。それを日本のメディアは憲法違反の疑いがあり、「論議を呼ぶ」と報道しました。今回のPKO協力法の改正は、住民の安全確保業務や人道支援活動を展開しているNGO職員などを守るための「駆け付け警護」を認め、任務遂行型の武器使用も可能にしました。当然だと

のではないですか。

谷あい 内戦中のアンゴラでは、常に恐怖と隣り合わせでした。実際に反政府ゲリラの襲撃を受けたNGOもありました。危険といえば危険で

考えます。停戦合意の条件が満たされているのに、目の前で助けを求める人を救えない自衛隊のままですよというのは、国際人道支援の現場の実情に向き合えない、空疎な議論だと思っています。

——谷あいさんが掲げる「人間の安全保障」とは。

谷あい 世界には戦争がなくとも貧困や飢餓、テロ、感染症などで安全を脅かされている人々がいます。国家の安全ではなく、あくまで一人の人間の安全に焦点を当てて、その阻害要因を除去していくのが「人間の安全保障」の考え方です。

では、食料、医療支援をすれば事足りるかと言えばそうではありません。難民にとって一番つらいのは、食料や医療が行き届かないことではな

すが、その中でプロジェクトを黙々とこなすのが、アムダのような人道支援団体です。一番厳しいところで働きたいと思っていましたから、それは良かった。

——2004年の参院選に初当選し、国会議員として国際人道支援に取り組むことになりましたね。

谷あい 難民支援の最前線を歩く中で、「難民を助けることはできても難民をなくすることができない。地上から、難民・貧困・戦争をなくす事がしたい」と考えるようになり政治家を志しました。国会議員になってからも、スマトラやハイチなど大津波の被災地に駆け付けたほか、日本が国連平和維持活動(PKO)を展開している南スーダンのジュバでは、自衛隊の派遣前に現地調査しました。常に、現場に駆け付け、現場から考える議員でありたいと肝に銘じています。

世界の「悲惨」我が事として

く、希望や尊厳を失うこと、「誰にも知られない、必要とされていない、忘れられていく」ということです。だから、人間として必要とされる存在になるための機会をつくる支援が、「人間の安全保障」の大事な側面だと思います。

そして、この「人間の安全保障」を支え、動かしていくのは、世界の「悲惨」を他人事ではなく、我が事として捉える心だと確信しています。ガザの子どもたちが、遠くの日本の震災被災地の復興を我が事として祈ってくれているように。この人間の「共感」を原動力とする平和の構築と、一人の人間の幸福に光を当てる政治を実現するために、今後も、粘り強く、行動を積み重ねていく決意です。

(13日付に続く)